

2017/4/26

(日々雑感 89)



「任せて下さい。私たちがなんとかやります。だから休んで下さい。どうか、お願いだから、少しやすんでもらえませんか？ 私たちに任せて」

これが生まれはじめて自治会役員になって一ヶ月足らずの「普通の奥さん方」の口をついて出た言葉でした。

会社の仕事、社会事業の仕事、その資金を稼ぐための投資の仕事、家の問題の仕事、その中でも突出して最近増えていた副会長兼防犯部長としての自治会の仕事で、ついに寝る時間も殆どなくなり、寝ているんだか、起きているんだかもよく分からない状態で、自治会の集まりに行ったのですが、流石に眠気と体力の消耗には、意志の力では打ち勝つことが出来ずに、みんなの前で路上に突っ伏しそうになってしまいました。

実は自治会の仕事は僕の上の方からは10やってきました。あまりにも思いつきによる、追加、変更、さらにはその再々変更、結果、最初に逆戻りというような事態が頻繁に起こっていたからです。

しかしそれでは、全くの新米の部員役員さんは、こなすことが無理だし、それに対して部員に咎を言えば、自治会の仕事そのものを放棄して仕舞いかねない危惧もあったので、上と部員の調整弁になって、流すのが10あるところを3にしたり、あるいは部員に育て貰うために、ノウハウをオン・ザ・ジョブトレーニングで教えながら仕事を進めるにはとても時間が必要なのですが、それだと納期に間に合わない場合には、自分が見えないように手を加えて、上に戻したりもしていました。

しかし、そういった黒子の調整弁が働いていることを知らない上の方は、仕事を与えたり、指示している事柄の量が極めて妥当であり、この先それを更に増やしても問題ないだろうと判断していたようで、最近ではその量が半端ではなくなっていたのです。

流石にそれに対して仕事量の見直しを上の方に具申しましたが、その意味するところを上の方は、理解はしても実感がまるで出来ないようで、相変わらず仕事量は増え続けていたのです。

今思えば、恐らく「普通の奥さん方」は薄々そのことに感づいて居たのかもしれませんが。そうしてついに、僕も力尽きて、覆い隠せなくなり、路上にうずくまってしまったのが昨日だったのです。

それを見て、普通の奥さん方が駆け寄ってきて、僕の身体を支え、言った言葉がさっきの言葉だったのです。

「任せて下さい。私たちがやりますから」

「おんなの男気」の瞬間だったのです。

ふらふらになって、呼んだタクシーに乗り込みながら、とても嬉しい気持ちになりました。たったひと月に満たない間に「普通の奥さん方」がそうになってくれたことが、とても嬉しかったのです。

僕は全てをお任せして、タクシーに乗り込み運転手さんに仮の宿に向かうように言いました。

流石に上の方も、実感を伴って理解して下さったようです。

「あんまり部員にボカスカ爆弾を投げないで下さいよ。折角やる気になっているんですから、その芽を摘むようなことは絶対にしないようにお願いしますよ」

上の方にはそう言い残して、帰路につきました。